

中日両言語の重複表現・対比表現・比喩表現について
Concerning Duplication Expression, Comparison Expression
and Figure of Speech in Chinese and Japanese

高橋弥守彦
TAKAHASHI Yasuhiko

内容提要

汉语中常有重复表达、对比表达和比喻表达，而日语中除了比喻表达偶尔使用以外，其他两种表达形式几乎不使用。为什么汉语时常使用的这三种表达形式日语却几乎不用呢？本文从汉日分属“表意文字”和“表音文字”的语言特点出发，通过对两种语言的对比分析，进一步阐明其原因所在。

目次

- 0 はじめに
- 1 対の文化と非対の文化
- 2 重複表現
- 3 対比表現
- 4 比喩表現
- 5 おわりに

0 はじめに

重複表現“沉默寡言”[黙ったままだ]・対比表現“东张西望”[あちこち見る]・比喩表現“山欢水笑”[山が喜び、水が笑う]¹⁾は、中国語の特徴の一つである。これらの表現は、構造は異なるものの、すでに《论语》にも見られる。

(1) 子曰、視其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋哉、人焉廋哉。(『論語・為政第二』)

子曰く、其の以てする所を視、其の由る所を觀、其の安んずる所を察すれば、人焉ぞ廋さんや、人焉ぞ廋さんや。(『論語』新釈漢文大系 p.45)

¹⁾ “山欢水笑”[山が喜び、水が笑う]は、実質視点からの中国語表現であり、日本語は話題視点からの表現なので、[山が喜び、川が笑う]と訳す方がいいだろう。

(2) 子曰、不患人之不己知。患不知人也。(『論語・学而第一』)

子曰く、人の己を知らざるを患へず。人を知らざるを患う。(『論語』新釈漢文大系 p.33)

(3) 子曰、为政以德、譬如北辰居其所、而众星共之。(『論語・為政第二』 p.34)

子曰く、政を為すに徳を以てするは、譬えば北辰の其の所に居て、衆星の之に共するが如し。(『論語』新釈漢文大系 p.34)

下線部は例(1)が重複表現、例(2)が対比表現、例(3)が比喩表現である。中国語はこれらの表現が昔からよく使われ、今でもよく使われている。おそらく、将来もよく使われるだろう。それに対し、日本語は昔から今まで、さほど使われていない。中日両国のこれらの言語使用状況は、これからも変わらないであろう。

日本語に比べ、中国語ではなぜこのような表現がよく使われ発達したのだろうか。それに対し、これらの表現が日本ではなぜあまり普及せず発達しなかったのだろうか。特にこのうちの重複表現は、日本語ではむしろ避けられる傾向にある。それはまたいったい何故なのだろうか。

本稿では重複表現・対比表現・比喩表現を調査・検討し、中日両国の発達の違いを分析し、その理由を明らかにする。

1 対の文化と非対の文化

中国語の代詞は“这”“那”であり、日本語の代名詞は[これ][それ][あれ]である。植被も中国語は“树木”“森林”であり、日本語は[木][林][森]²⁾である。このような基本的な表現であっても、中国語は二項表現が多く、日本語は三項表現が多い。中日両国の伝統的な絵画を見ても、夜の景色であれば、中国はよく満月、日本は三日月³⁾である。また、時代劇では中国は剣を使い、日本では刀⁴⁾を使う。これらは中日両国の文化を反映し、歴史を反映している。

数字は生活面で非常に重要である。買物などに使う具体的な数字は特に重要である。この具体的な意味を表す数字を基礎にして、自然環境をもとにした『老子』などの思想⁵⁾に

²⁾ 日本語の[もり]には[森]と[杜]の二つの漢字がある。前者はヒトの手の入っていない、いろいろな種類の木がたくさんあるところであり、後者は木に土が持っており[例：鎮守の杜]の意味である。昔からある神社の境内を囲む大きな木には、今でも土が盛ってある。

³⁾ 時代劇の夜の景色には、中国では[満月]がよく出てくるが、日本では[三日月]が出てくる。これは両国の文化的特徴を表している。[満月]は円満・団結を意味し、[三日月]はこれから大きくなる拡大・発展を意味する。どちらも縁起ものである。

⁴⁾ [剣]は両刃であり、[刀]は片刃である。この違いは、剣は刺すのが主体で、刀は切るのが主体だからである。剣は猛獣を刺し殺す槍から発展したので両刃であり、刀は少数民族がよく動物の皮を剥ぐのに使ったので、片方だけが切れるようにしてある。

⁵⁾ 高橋弥守彦(2017:p.51~52)では、中日両国の数字文化は、いずれも老荘思想から出ており、老荘思想に言及している。

より、中日両国の数字文化が長い年月をかけて形成される。一般的に言えば、中国民族は偶数を好み、日本民族は奇数を好む傾向にある。しかし、“一”と“八”⁶⁾だけは、両国にとっても縁起が良いので、今でも両民族は好んで用いている。

中国民族が偶数を好む理由は「対」からなる自然環境に由来し、日本民族が奇数を好む理由も「非対」からなる自然環境に由来している。これを理論づけたのが陰陽思想である。そのため、数字文化の根底には陰陽思想がある。道観を表すマークは丸のなかに陰陽の二つがあり、神社のマーク（靈魂と言われている）は丸のなかに陰陽とよく似たマークが三つ（日本の神社のマークは一般に三つだが、ごくまれに一つまたは二つのところもある。）ある。このことから中国民族の根底には対を意味する“二”があり、日本民族の根底には非対を意味する「三」のあることが窺える。

本稿では前者を「対の文化」と名付け、後者を「非対の文化」と名付ける。どちらも自然環境に由来しているが、それを理論付けたのが老荘思想である。ただし、現代中国人の数に対する音“四”は“死”と同音なので、現代中国人のなかには“四”を用いることを避ける傾向にある人もいる。日本人は[四]が[死]と同音なので昔から避ける傾向にある。中日両国の数字文化は、今でもかなり重要な位置を占めているものの、中日両国における現代の数字文化にはやや変化が生じている、と言える。

中日両国の数字に対する文化は、偶数は「対」となって調和や安定をもたらすという中国民族に対し、偶数は二つに割れるので、両者の「わかれ」を意味し、縁起が悪いとする日本の文化がある。奇数は何か欠けているので不完全であるとする中国民族に対し、奇数は割り切れないので縁起が良いとする日本の文化がある。中日両民族では、数字文化に対する概念が異なる。しかし、これらはともに自然環境から生まれた文化なので、双方が両国の言語や文化を学習することにより、それぞれの数字文化を理解することが肝要である。

この中日両民族の自然環境に由来する数字文化から、両民族の好むリズムが生まれる。中国民族には「四字一句」や「対」を好む傾向が生まれ、さらに四字一句や対のリズムが生まれる。対のリズムからは絶句や律詩などの定型詩が生まれる。日本民族は「非対」を好む傾向から、俳句・短歌・川柳などの五七五を基本とするリズムが生まれる。これらの数字文化やリズムは、今でも自然環境を重要視する中日両民族の言語のなかに活かされている。そればかりではなく、縁起ものである結婚式で包む祝儀やプレゼントにも活用され、生き生きと機能している。これらは、ともに中日両国で長い伝統に培われて形成された優れた言語と文化なので、お互いに双方の言語と文化を学習・研究する必要がある。それにより、学術交流・経済交流・民間交流などを促進し、両民族が親しく交流することによって、中日両国の言語と文化の違いを理解し、誤解を招かない相互交流の一助とする必要が

⁶⁾ 高橋弥守彦（2017：p.46～48）では、縁起と数字とに言及している。その中で“一”と“八”も紹介している。

あるだろう。

2 重複表現

重複表現には、意味的な重複と構造的な重複とがある。重複表現は、中国語ではどちらの重複もよく使われるが、日本語ではどちらも避けられる傾向にある。なぜなのだろうか。

2.1 意味的な重複表現

中国語の意味的な重複表現にはいろいろな構造がある。その代表的な表現は四字語であり、四字成語“沉默寡言”と四字熟語“出差在外”とに大別できる。しかし、四字成語が圧倒的に多い。日本では避けられる傾向にある四字語が、中国ではなぜ発達したのだろうか。

2.1.1 四字語による意味的な重複表現

四字語による意味的な類義重複は文章中にたくさん使われ、構造も以下に挙げるように多様である。

(4) 一路上多多沉默寡言，他知道自己做错了事。（『人民』89-1-99）

歩きながら、多多はだまったままだ。自分が悪いことをしたのを知っていたからだ。（同上）

(5) 那次之后，姥姥便再没有提她的绿玉手镯，舅妈伺候姥姥一如从前一样体贴细致，只是姥姥的神态中少了先前那种受之泰然的成份。（『人民』91-1-97）

それからは、祖母は二度と緑玉の腕輪のことを口にしなかった。おばも前と同じように、やさしく、かゆいところまで手の届くような世話をしてくれた。ただ、祖母の表情を見ていると、前にあった「モノがあるからよくしてくれているんだという安心感」が、いくらかでもなくなっていたようだった。（同上）

(6) 舅妈对姥姥极好，照顾得周到细致挑不出半点毛病。（『人民』91-1-96）

おばは祖母にとっても親切で、少しの欠点もないくらい、キメ細かに面倒を見てくれる。（同上）

(7) 不过，咱先说点儿眼前的事。别没完没了的，趁早结婚吧。（『人民』94-10-97）

だが、まずは目先の話をしよう。ごちゃごちゃ言わずに、早くカレと結婚することだ。（同上）

(8) 但突然有一天，她接到一封电报。说他出差在外，不幸遇车祸。（『人民』96-11-85）

ある日、突然彼女宛に一通の電報が届いた。彼が出張先で交通事故に遭ったというのだ。（同上、96-11-84）

例(4)から(8)はよく使われる四字成語である。四字成語の構造を見ると、品詞のくみあわせにはあまりこだわらないようである。ちなみに、例(4)の“沉默寡言”は「動詞+動詞」、(5)の“体贴细致”は「動詞+形容詞」、(6)の“周到细致”は「形容詞+形容詞」である。(7)の“没完没了”は動詞“完了”を副詞“没”でどちらの語素も否定し、否定を強調するとともに、四字成語にしてリズムをよくしている。(8)の“出差在外”も2つの単語をくみあ

わせた四字熟語であり、リズムをよくするために、類義の単語「動詞+動詞」のくみあわせにより表現している。これらから、単語をくみあわせて作る四字成語も四字熟語も意味を分かりやすくリズムをよくしていると言える。上記はいずれも用言性の単語を核としているが、以下の四字成語は、名詞性語素と動詞性語素などとのくみあわせである。

(9) 她变得心灰意冷。(『人民』88-9-97)

彼女はすっかり気落ちしてしまった。(同上)

(10) 我心灰意疏，收拾了笔墨纸砚，打算与十年寒窗告别。娘说：“再试一年吧。”(『人民』97-5-87)

すっかり落ち込んだ僕は、勉強道具を片づけて、十年以上にわたった学校生活におさらばしようと思ったのだが、おふくろが「もう一年頑張れ」という。(同上、97-5-86)

(11) 一声撕心裂肺的呼唤，“琴——”(『人民』88-9-98)

「琴——」胸も張りさけるばかりの叫びがあがった。(同上)

(12) 于是父亲又穿得像模像样，每天按时上下班了。(『人民』94-10-97)

こうして父親は、再び服装をととのえ、毎日時間通りに行き帰りするようになった。(同上、94-10-96)

(13) 这可是名贵的花种呢，开了花要上百块一盆，请三托四好不容易弄到的，糟蹋不得。(『人民』89-3-100)

これは名花のタネなんだ、花がひらけば一鉢百元ほどの値打ちがある。それに、あちこち頼んでも、めったに手に入るものではないから、一粒たりとムダにはできなかつたのだ。(同上)

例(9)(10)(11)の成語“心灰意冷”“心灰意疏”“撕心裂肺”は、いずれもヒトと関係する語素が使われ四字成語を作っている。(12)の“像模像样”の構造は品詞の違いこそあれ、(7)の構造“没完没了”によく似ている。(13)の“请三托四”は「動詞+数詞」から作られている。構造は異なるが、中国語で四字語が多いのは、中国語ではまとまり性のある四字語にすると、意味が分かりやすくリズムが良くなるからである。以下では意味的な重複が四字語以外で作られている語句を調べてみよう。

2.1.2 四字語以外の意味的な重複表現

以下の文中に現れた下線部で示す語句の意味的な重複表現は、異なる角度からの四字語以外で作る意味的な重複である。中国語では、なぜこのような意味的な重複表現が好まれるのだろうか。

(14) 有次，小洁出差不在家，阿浓邀了几个朋友来家小聚，似乎意在弥补什么。(『人民』94-1-93)

ある日、小潔が出張で家をあけた。阿濃は、なにがしかの埋め合わせにとばかりに、友達を数人よんでささやかな会をもよおした。(同上、94-1-92)

(15) 父亲茫然四顾时才发现儿子并未出门，而是坐在他身后看书。(『人民』88-8-

100)

父親は力無げにあたりを見まわした。(※父親が何気なくあたりを見まわすと、息子は出かけてはいなかったのだ。しかも、彼のうしろで本を読んでいる。(同上)

- (16) 后来老孙头给自己派了个活，每天早晨四点钟起床，把这条二百多米长的小胡同打扫得干干净净，然后回到院里，再把院子扫净。(『人民』88-5-90)

そのうち、孫老人はやることを自分で決めた。毎朝四時に起き、二百メートルの路地をきれいに掃いたら、庭に戻って中庭を清掃する。(同上)

- (17) 大约十五六平方米的屋子里，摆一张双人床，一张单人床。一张占地不大的学生桌，桌上放着元元的课本和作业。(『人民』97-2-87)

十五、六平方メートルはあろうかという家の中は、ダブルベッドとシングルベッドがひとつずつ、それに小型の勉強机がところせましと置かれ、机の上には息子の元元の教科書とノートが積まれている。(同上、97-2-87)

例(14)の意味的な類義重複“出差不在家”[出張で家をあけた]は、“出差”[出張する]と“不在家”[家にいない]の意味的な類義重複である。同一語句の重複ではなく、異なる語句を用いて作る類義重複である。例(15)の“发现儿子并未出门，而是坐在他身后看书”[息子は出かけてはいなかったのだ。しかも、彼のうしろで本を読んでいる]は、やはり同一語句の重複ではなく、異なる角度から表現する二つの語句“发现儿子并未出门”[息子は出かけてはいなかったのだ]と“而是坐在他身后看书”[しかも、彼のうしろで本を読んでいる]を用いる類義重複である。例(16)の“这条二百多米长”[二百メートル]は、具体的な距離“这条二百多米”とその長さ“长”である。例(17)の“大约十五六平方米”[十五、六平方メートル]は、大まかさを表す副詞“大约”と大まかな面積“十五六平方米”との組み合わせである。

このような意味的な類義重複は、意味を分かりやすくリズムもよくするので、中国の「対の文化」に支えられ、これからも増えることはあっても減ることはないだろう。

2.2. 構造的な虚詞の重複

本節の虚詞による構造的な重複表現は、2つ以上の出来事の関係を表す虚詞である。同一虚詞は一般に2つか3つの虚詞を用いる場合が多いが、ごくまれに4つの虚詞を用いる場合もある。上掲の類義の実詞も、それを訳すと冗漫になるので訳さないが、虚詞もその傾向があるので一般に訳さない。

- (18) 她又想不看，又忍不住偷偷地看。(『人民』89-6-100)

見るまいと思っても、ついついおさえ切れずに見てしまう。(同上)

- (19) 每一声车鸣，带来一串又一串欢快的笑声，涌动着一阵又一阵暖暖的亲情!(『人民』15-1-78)

車(※バス)の到着を告げる音と共に、歓喜の笑い声と温かな肉親の情がひとつ、またひとつと湧き起こる。(同上)

- (20) 尽管还没出芽、没长叶、没开花。但一切都会有的。(『人民』89-3-100~101)
 まだ芽も、葉っぱも出ていないし、花も咲いていないけれど。それでも、みんな出てくるはずだ。(同上、89-3-101)
- (21) 像候鸟一样，在外的儿女都回到了家乡。无论路途远近，无论寒风细雨，更无论富贵与否。(『人民』15-1-78)
 渡り鳥と同じように、外に住む子どもたちはみんなふるさとに戻ってくる。どれほど遠くにいようが、どれほど悪天候であろうが、ましてやお金のあるなしにかかわらず(※ましてやどんなに貧乏であろうが)。(同上)
- (22) 你大了不再崇拜父亲。你越来越沉默，你不再抱怨父亲呆板僵化，不再为各种政治问题与父亲争论不休，也不再说什么父亲刚愎自用。(『人民』88-8-99~100)
 大きくなったら、父親を尊敬することもなくなったし、一層黙り込むようになった。無愛想な、しかめっ面したわしにヘソをまげることもない。政談を戦わすこともない。親父は強情っ張りで、自信家だとも言わなくなった。(同上、88-8-100)

例(18)から(21)までは、1つの単語(虚詞)の重複(繰り返し)“又…又…、没…没…、无论…无论…”だが、例(22)は2つの単語(虚詞：“不”“再”)を連用して用いる語句の重複“不再…不再…”である。これらの虚詞は2つ以上の出来事の意味関係を表し、リズムを整える重要な機能を担っている。たとえば、例(18)は2つの異なる気持ち“想不看”“忍不住偷偷地看”を副詞“又…又…”により表し、例(19)の“又…又…”は、出来事が多いことを表している。同一の副詞を重複させ、2つ以上の出来事の関係を見事に表現している。以下の2例では、異なる虚詞による2つ以上の出来事の意味関係を表している。

- (23) 只见她先是一楞，接着吃饭的手都有点发颤了，一口饭半天也咽不下去。(『人民』89-6-100)
 驚いた鞠さんはそのうち食事をする手も少しふるえ、ひとくちのご飯も、容易にのどを通らなくなった。(同上)
- (24) 等朋友走后，阿浓又是扫又是拖，还用了吸尘器，折腾了好一阵，才把所有的痕迹清扫干净。(『人民』94-1-93)
 彼らが帰ったあと、阿濃はほうきではき、モップで床をふき、掃除機も使った。何度も繰返したおかげで、部屋はすっかりきれいになった。(同上、94-1-92~93)

例(23)の“先…接着…”と(24)の“又…又…还…才…”は、ともに異なる出来事の順番を表し、リズムを整えている。たとえば、例(23)の“先…接着…”は2つの出来事“是一楞”[驚いた]、“吃饭的手都有点发颤了”[食事をする手も少しふるえ]を理由とし、最後に結論“一口饭半天也咽不下去”[一口のご飯も、容易にのどを通らなくなった]を述べている。

これは具体的な出来事を列挙し、それを統合的に表現する文章表現法の一つ⁷⁾である。

3 対比表現

対比表現は、一般には一方がよく分からなかったり、両者がよく似ていたりする場合、二つの出来事を対比することにより、両者の特徴や相違点を明確にするばかりでなく文意も分かりやすくする表現方法である。対比表現にすると、中国語は分かりやすくリズムカルになるので、今でも「対の文化」に支えられ、この表現方法はよく使われるが、日本語の対比表現は重複表現と同様であり冗漫になる傾向があるので、さほど使われない。

3.1 語素、単語の対比で作る成語

二つの単語で対比表現を作る成語は、一般には二つの単語をくみあわせて対比させることにより、意味を分かりやすくリズムを良くして、一つのまとまり性のある出来事を表現している。

(25) 一个身材瘦削的男青年正在招牌下伫立着往街道东张西望。(『人民』89-10-101)
やせた若い男がその下にじっと立って通りをあちこち見ている。(同上)

(26) 爹当村干部，整日东奔西跑为公家忙碌得顾及不了家庭，弟妹又小，一家的重担都搁在娘肩上。(『人民』97-5-87)

親父は村の幹部で家は空けっぱなし。弟妹が小さいから一家の重荷が全部おぶくろの肩に掛かっているのだ。(同上、97-5-86)

(27) 字，一笔一划，横平竖直，是标准的仿宋体，根本看不出一点个人风格。(『人民』93-2-111)

字は、筆画がたてよこ真っすくな、宋朝活字体できっちりしているので、全く個性が見出せない。(同上、93-2-110)

例 (25) の“东张西望”は名詞“东西”と動詞“张望”、例 (26) の“东奔西跑”も名詞“东西”と動詞“奔跑”、例 (27) の“横平竖直”も名詞“横竖”と形容詞“平直”とのくみあわせである。これらのくみあわせにより、意味を分かりやすくリズムを整え、それぞれまとまり性のある一つの出来事を表している。

3.2 文の対比

以下のように、文(単文・複文)によっても対比表現が作れる。単文や複文の意味を活かして両者を対比させる方法である。

(28) 阿浓怀念没有拖鞋的日子。阿浓也很欣赏有了拖鞋后的家。(『人民』94-1-93)
阿濃は、スリッパがなかった日々をなつかしく思う。そして、スリッパを置くようになってからの家はすばらしい、とも思う。(同上)

⁷⁾ 日中国交回復時の田中角栄総理の「多大なご迷惑発言」も日本語独特の統合化表現だけのため、発生した問題であった。これに対し、その表現方法として、単語の選択とどのような文構造(「具体+具体+統合」「統合+具体+具体」)で書くかが重要な問題となった。

(29) 直到她结婚。直到她再嫁。 (『人民』96-11-85)

彼女が結婚するまで。彼女が再婚するまで。 (同上)

(30) 亲爱的爸爸妈妈，我们回来了！亲爱的孩子，爸爸妈妈回来了！ (『人民』15-1-78)

お父さん、お母さん、僕たちは帰って来たよ。わが愛しき (※愛する) 子どもたちよ、父さん、母さんが帰って来たよ。(同上)

(31) 遇到不喜欢的人不喜欢的话就好办了，把结成的冰随意弃置就可以了。爱听的话则可以煮一半，留一半他日细细品味，住在北极的人真是太幸福了。 (『人民』15-2-70)

嫌いな人に嫌なことを言われたら、これは簡単。言葉の氷を適当に捨ててしまえばいいし、うれしいことを言われたら半分だけ溶かして、半分はとっておき、別の日にゆっくりと味わう。北極に住んでいる人は、本当に幸せだ。 (同上)

例 (28) の文“阿浓怀念没有拖鞋的日子。阿浓也很欣赏有了拖鞋后的家” [阿濃は、スリッパがなかった日々をなつかしく思う。そして、スリッパを置くようになってからの家はすばらしい、とも思う] は、前者と後者の主体“阿浓”は同じだが、出来事が異なっている。例 (29) の文“直到她结婚。直到她再嫁” [彼女が結婚するまで。彼女が再婚するまで] と例 (30) の複文“亲爱的爸爸妈妈，我们回来了！亲爱的孩子，爸爸妈妈回来了！” [お父さん、お母さん、僕たちは帰って来たよ。愛する子どもたちよ、父さん、母さんが帰って来たよ] の主体は異なるが、出来事はよく似ている。この3例は、2項の出来事を用いた対比であり、構造も意味も分かりやすく、リズムカルである。

例 (31) の“遇到不喜欢的人不喜欢的话就好办了，把结成的冰随意弃置就可以了。爱听的话则可以煮一半，留一半他日细细品味，住在北极的人真是太幸福了。” [嫌いな人に嫌いなことを言われたら、これは簡単。言葉の氷を適当に捨ててしまえばいい、うれしいことを言われたら半分だけ溶かして、半分はとっておき、別の日にゆっくりと味わう。北極に住んでいる人は、本当に幸せだ] は、かなり複雑である。これは対比となる構造が、前者は複文“遇到不喜欢的人不喜欢的话就好办了，把结成的冰随意弃置就可以了”であり、後者の複文は二つの分文“爱听的话则可以煮一半，留一半他日细细品味”で、その後の分文“住在北极的人真是太幸福了”に結論が書かれているからである。例 (31) の後者の構造は、外国人にとっては複雑だが、2項の対比なので構造が分かりやすく、全体的に見れば「具体+具体+統合」⁸⁾ の伝統的な中国語表現法の一つなので、中国人にとっては受け入れやすい構造と言える。

3.3 分文の対比

本節は、以下の実例に見られるように、複文中の分文対比である。分文対比にもいろいろ

⁸⁾ 日中国交回復時 (1972) の田中角栄の「多大なご迷惑」発言は、この書式ではなく、日本語独特の「統合表現」だけだったので、大きな問題となったのであろう。

ろな構造があるが、どの構造であっても複雑になりがちな複文の意味を分かりやすくリズムカルにしている。

- (32) 弟骑着一辆旧自行车，驮着两袋黄灿灿的小麦，给我送到学校面粉厂。（『人民』97-5-87）

弟がオンボロ自転車に粒よりの小麦を二袋も積んで、学校の製粉場に届けてくれた。（同上、97-5-86）

- (33) 人生最大的悲哀就是不期望的事儿总是接踵而来，而期望的事儿一辈子都期望不到。（『人民』88-7-101）

人生の（※ [の] をとる）最大の悲哀は、期待しないことばかり（※ [が] を加える）起きて、期待していることが一生実現しないことだ。（同上）

- (34) 化妆最先是为了欺人，之后就成了自欺。（『人民』15-4-70）

化粧はまずは人を欺くためのものだったけど、後には自分をも欺くようになった。（同上）

- (35) 我决定委屈儿子了，因为我伴同他的时日还长，我伴同母亲的时日已短。（『人民』15-3-68）

私は息子に我慢してもらうことにした。なぜなら私が彼といられる時間はまだ長い、母と一緒にいられる時間はもうあまり残されていないからだ。（同上）

- (36) 学堂摆在河北岸的山坡上，山上有花有草，河里有鱼有虾，环境很优美。（『人民』94-7-93）

教場が、川の北側の山の斜面にできた。山には花も草もあり、川には魚もえびもいる。（同上、94-7-92）

- (37) “去吧，去吧，我也去”。伯父笑着说，“她从来没见过柚子，我是四十年没吃过柚子，我们都得了思柚病。”（『人民』93-6-111）

「行こう、行こう。わしも行くよ」伯父は笑いながら言った。「この子はまだザボンを見たことがないしな、わしだって、もう四十年も見て（※食べて）ない。

わたたちはザボンシックにかかっているんだよ」（同上、93-6-110）

例（32）の分文対比“弟骑着一辆旧自行车，驮着两袋黄灿灿的小麦”[弟がオンボロ自転車に粒よりの小麦を二袋も積んで]は、主体“弟”が同じであっても、出来事を対比させることにより、両者の対比を顕著にして意味を分かりやすくしている。例（33）の分文対比“人生最大的悲哀就是不期望的事儿总是接踵而来，而期望的事儿一辈子都期望不到”[人生最大の悲哀は、期待しないことばかりが起きて、期待していることが一生実現しないことだ]も、主体“人生最大的悲哀”が同じであっても、出来事を対比させることによりコントラストを顕著にしている。例（34）の分文対比“化妆最先是为了欺人，之后就成了自欺”[化粧はまずは人を欺くためのものだったけど、後には自分をも欺くようになった]も、主体“化妆”が同じであっても、出来事を時間的に対比させコントラストを顕著にしている。例（35）の“我伴同他的时日还长，我伴同母亲的时日已短”[私が彼といられる時間はまだ長

いが、母と一緒にいられる時間はもうあまり残されていないからだ] も、主体“我”が同じであっても、出来事を対比させコントラストを顕著にしている。例(36)の“山上有花有草，河里有鱼有虾”[山には花も草もあり、川には魚やえびもいる]は分文の主体“山上、河里”も出来事“有花有草、有鱼有虾”も異なるが、二つの分文を対比させ両者の特徴を明らかにしている。例(37)の“她从来没见过柚子，我是四十年没吃过柚子”[この子はまだザボンを見たことがないしな、わしだって、もう四十年も食べてない]も、分文の主体“她、我”も出来事“从来没见过柚子、是四十年没吃过柚子”も異なるが、二つの分文を対比させ両者の特徴を明らかにしている。以下の文はセミコロンを用いる対比である。

(38) 我想找一个两全的办法，找不出；我想拆散一家人，分成两路，各得其所，终不愿意。(『人民』15-3-68)

私はどちらも立てられる方法を考えたが、思いつかなかった。家族を分けて、二つの道を行き、どちらの希望もかなえることも考えたが、結局それは望ましいとは思えなかった。(同上)

(39) 后来发生了分歧：母亲要走大路，大路平顺；我的儿子要走小路，小路有意思。(『人民』15-3-68)

そのあと、意見が割れた。母は大きな道を歩きたがった。大きな道は歩きやすいからだ。息子は小道を歩きたがった。小道は面白いからだ。(同上)

(40) 到了一处，我蹲下来，背起了母亲；妻子也蹲下来，背起了儿子。(『人民』15-3-68)

あるところで、わたしはかがんで母を背負った。妻もかがんで息子を背負った。(同上)

(41) 我的母亲虽然高大，然而很瘦，自然不算重；儿子虽然很胖，毕竟幼小，自然也轻；但我和妻子都是慢慢地，稳稳地，走得很仔细，好像我背上的同她背上的加起来，就是整个世界。(『人民』15-3-68)

私の母は大きいけれども、痩せていて、当然それほど重くなかった。息子はまるまるとしてしたが、幼かったから当然軽かった。でも私と妻はどちらもゆっくりと、しっかりと、慎重に歩いた。私の背と、彼女の背に負ったものを合わせると、まるで世界丸ごとであるかのように。(同上)

(42) 我的母亲老了，她早已习惯听从她强壮的儿子；我的儿子还小，他还习惯听从他高大的父亲；妻子呢，在外边，她总是听我的。(『人民』15-3-68)

母はもう年をとったので、かなり前から強壯(※強健)な息子の言うことに従うようになっていた。息子はまだ小さいので、大きな父の言うことを聞いた。妻は、外ではいつだって私の言う通りにしている。(同上)

例(38)から(42)まではセミコロンによる対比である。例(38)から(41)まではセミコロンを一つ使うことによりセミコロンの前後の対比を顕著にし、例(42)はセミコロンを二つ使うことにより、セミコロンの前後に用いる3項目の対比を顕著にしている。こ

れらは長文をセミコロンの使用により、いずれも二者や三者を対比させ、意味を分かりやすくリズムカルにしている。

例(38)の“我想找一个两全的办法,找不出;我想拆散一家人,分成两路,各得其所,终不愿意”[私はどちらも立てられる方法を考えたが、思いつかなかった。家族を分けて、二つの道を行き、どちらの希望もかなえることも考えたが、結局それは望ましいとは思えなかった]は、主体“我”が同じだが、出来事“想找一个两全的办法,找不出”“想拆散一家人,分成两路,各得其所,终不愿意”を対比させることにより両者を対比している。例(39)の“母亲要走大路,大路平顺;我的儿子要走小路,小路有意思”は、主体“母亲、我的儿子”も出来事“要走大路,大路平顺”“要走小路,小路有意思”も異なるが意味的な対比を表している。例(40)の“我蹲下来,背起了母亲;妻子也蹲下来,背起了儿子”[わたしはかがんで母を背負った。妻もかがんで息子を背負った]は、主体“我、妻子”は異なるものの、出来事は類似している。例(41)の“我的母亲虽然高大,然而很瘦,自然不算重;儿子虽然很胖,毕竟幼小,自然也轻”[私の母は大きいけれども、瘦せていて、当然それほど重くなかった。息子はまるまるとしていたが、幼かったから当然軽かった]も、主体“我的母亲、儿子”は異なるが、出来事は類似し、両者の特徴が分かりやすく表現されている。

例(42)の“我的母亲老了,她早已习惯听从她强壮的儿子;我的儿子还小,他还习惯听从他高大的父亲;妻子呢,在外边,她总是听我的”[母はもう年を取ったので、かなり前から強健な息子の言うことに従うようになっていた。息子はまだ小さいので、大きな父の言うことを聞いた。妻は、外では私の言うとおりにしている]は、セミコロンを二つ使っている。主体“我的母亲、我的儿子、妻子”はそれぞれ異なるが、出来事はやはり類似しているものの、それぞれの主体の特徴を分かりやすく説明している。

4 比喩表現

比喩表現とは複雑な分かりにくい出来事を誰でもが経験したり、よく知っていたりする分かりやすい出来事に喩えることを言う。中国語の比喩表現も「対の文化」に支えられ、いまでもよく使われている。本稿では比喩表現を直喩、暗喩の2類⁹⁾に分けている。

4.1 直喩

中国語の直喩は、“像…、如…、般…、好像…、好似…、似的…、似乎…、犹如…”(標識が名詞の前にあるAタイプ)“像…一样、像…那样、像…似的、好似…似的”(標識が名詞の前後にあるBタイプ)“…般、…似的”(標識が名詞の後にあるCタイプ)などの直喩となる標識を用いている文である。これらの文では、多くの人に知られていない何かを誰でもがよく知っている何かに喩え、分かりやすく表現している文を言う。直喩は今でもしばしば使われている。直喩の標識で一番多く使われているのはAタイプであり、その次はB

⁹⁾ 本稿では比喩表現を比喩標識の有無により、「直喩、暗喩(隱喩)」の二類に分類するが、よく一般には三類「直喩、暗喩、擬人法」や四類「直喩、暗喩、換喩、提喩」などに分けられている。

タイプ、Cタイプは少ない。Aタイプが多く使われるのは、直喩の標識が名詞の前にあるので、分かりやすいからである。

- (43) 银须飘拂，威风凛凛，像一堵墙挡住了上楼的通道。（『人民』90-4-99）
銀色のひげが揺れて、威風堂々、階段ののぼり口がふさがってしまったかのようだ。（同上）
- (44) 乡村的春节，快乐得无邪而纯粹，如田野吹拂而来的那缕春风，清新、自然而又满载一年的希望！（『人民』15-1-78）
ふるさとの春節は無邪気で純粋な楽しみでいっぱい、田畑を吹き渡る春風のように、新鮮で、自然で、1年の希望に満ち溢れている。（同上）
- (45) 有次，小洁出差不在家，阿浓邀了几个朋友来家小聚，似乎意在弥补什么。（『人民』94-1-93）
ある日、小潔が出張で家をあけた。阿濃は、なにがしかの埋め合わせにとばかりに、友だちを数人よんでささやかな会をもよおした。（同上、94-1-92）
- (46) 磨砺内心比油饰外表要难得多，犹如水晶与玻璃得区别。（『人民』15-4-70）
心を磨くことは、外観にペンキを塗ってきれいにするよりも、はるかに難しい。水晶とガラスとの違いほどに。（同上）

例(43)から(46)までは、一般に直喩の標識“像…、如…、似乎…、犹如…”が各分文の先頭にある場合の構造である。これらの標識を各分文の先頭に用いることにより、比喩表現の一つとしての直喩であることを明らかにし、分かりにくい出来事を分かりやすくしている。次にBタイプの比喩表現を見て行こう。

- (47) 她们像亲姐妹一样生活在一起。（『人民』96-11-85）
ふたりは実の姉妹のように仲良く暮らした。（同上）
- (48) 说完，她像赶小羊羔似地要胖胖上六楼。（『人民』90-4-98）
こういうと、蔣おばさんは子羊でも追うように胖胖を六階へせきたてた。（同上、90-4-99）
- (49) 来阿浓家的朋友渐渐少了，阿浓内心好似欠了朋友什么似的。（『人民』94-1-93）
家に来る友達がだんだん減ってきた。阿濃は、彼らに負い目のような気持ちをもつようになった。（同上、94-1-92）
- (50) 一霎时，我感到了责任的重大，就像民族英雄在严重关头时那样。（『人民』15-3-68）
瞬間、私は責任の重さに気づいた。民族の英雄が重大な決断を迫られた時のように、である。（同上）

例(47)から(50)までは、直喩の標識を文中で呼応させて用いる表現方法“像…一样、像…似地、好似…似的、像…那样”である。これらの表現により、直喩であることを明らかにしている。直喩の標識を呼応して用いるBタイプは分かりやすいが、標識を呼応させる

と文が長くなるので、比喩構造の簡単な文には用いられるが、一般にはさほど用いられていない。三番目にCタイプの比喩表現を見て行こう。

- (51) 冬去春来，她已看熟了那块草地般的绿窗帘。她已不希望它开启了，永远。(『人民』88-9-98)

冬は終わり、春になった。すっかり見慣れた草のように青々としたカーテン、あいてなんか欲しくない、と彼女は思った。永遠に。(同上)

- (52) “啊！”紧接着一个银铃般含嗔带娇的声音。“白杜鹃！白杜鹃！可是，太贵了呀。”(『人民』88-9-96)

「あらっ！」続けて、銀の鈴でも鳴らしたような甘えた声が返ってきた。「白のツツジ！白ツツジだわ！でも、高かったんじゃない？」(同上)

- (53) 后来，花儿风流过了，便结了果实，绒绒的一个小球，帽子似地顶在头上，好漂亮好漂亮！(『人民』89-3-102)

その後、花盛りは過ぎてしまったが、織毛の小さなボール状の実をつけた。帽子のように茎の頭にのせて、たいへんきれいだ。(同上)

- (54) 但栅栏似的假睫毛圈住的眼波，却暗淡犹疑。(『人民』15-4-70)

しかし柵のようなつけまつげに囲まれた目は、暗くためらいがちだ。(同上)

例(51)から(54)までは、直喩表現を名詞や名詞連語の直後に用い、比喩表現であることを明らかにしている。Cタイプも構造の単純な文には用いられるが、一般にはそう多くない。

4.2 暗喩

直喩の標識である“像…”“像…一样”“…似的”などを使わずに、分かりにくい出来事や突出させたい出来事を誰もがよく知っている分かりやすい出来事に喩える表現である。

- (55) 为了鸽子少一声啼哭多一个笑脸加一件新衣，他曾被雷电的金鞭抽下大海，曾被黑鲨的尾鳍砍断肋骨，……鸽子19岁了，是条美人鱼呢！(『人民』93-4-111)

鴿子の、一喜一笑、一枚の新しい衣服のために、雷に打たれて海にはねとばされたり、サメの尾ひれであばらを折ったりしたこともあったが……もう十九になり、人魚のように美しい！(同上、93-4-110)

- (56) 相爱时他曾写诗说：如果你是牵牛花，我就是一棵树。(『人民』96-11-85)

過ぎし日、彼が「もしきみが朝顔ならば、ぼくは大きな木になろう」という詩を書いてくれたことがあったのだ。(同上、96-11-84)

- (57) 一日下班，鬼使神差的我拉住主任：“有些话一直想同您说，不知当不当讲？”(『人民』96-4-87)

ある日、会社の退け時に私はまるで何かに唆かされたように、主任をよびとめた。「前からお話ししたいと思っていた事があるんですが、いまイデスカ？」(同上)

- (58) 方冬是在一个阳光灿烂的正午躺倒的，他觉得浑身的筋骨都被抽走了，身子软得

再也下不了床了。(『人民』96-8-87)

外は真っ昼間で、お日さまがちょうど頭の上に来る時刻だというのに、方冬は部屋のベッドに倒れ込んでしまった。まるでガンに全身の筋肉を抜き取られてしまったようで、体がへなへなでベッドから起き上がることもできなかった。

(同上、96-8-86)

(59) 山欢水笑。(『人民』15-1-78)

山が喜び、水(※川)が笑う。(同上)

(60) 风儿吹过，雨儿洒过，霞光染过，终于，抽出了一朵小花，淡黄的，泛着柔嫩的微光，还招来一只蜂儿，嗡嗡地唱着歌。(『人民』89-3-102)

風が吹き、雨にぬれ、霞に染まり、やっと小さな花がひとつ出てきた。淡黄色で、やわらかく淡い光を放っている。それに誘われて飛んで来たハチが一匹、「ブーン、ブーン」と歌を歌っている。(同上)

例(55)は美しく育った“鸽子”を“美人鱼”に喩えている。例(56)は“你、我”を誰もがよく知る“牵牛花、一棵树”に喩えている。例(57)は“鬼使神差”を“我”の限定語として使い、人間の能力を超えた鬼神が私をコントロールしていると表現“鬼使神差的我”している。例(58)はガンの恐ろしさを擬人法“觉得浑身的筋骨都被抽走了”[まるでガンに全身の筋肉を抜き取られてしまったようで]で述べ、例(59)は山や川の美しさを対比させ、擬人法“山欢水笑”で述べている。例(60)も花自体と花の周りに集まるハチを擬人法“嗡嗡地唱着歌”[「ブーン、ブーン」と歌を歌っている]で表現している。擬人法は人に喩えることにより、文意を分かりやすくし、リズムをよくする表現方法の一つである。

5 おわりに

中国の「対の文化」や日本の「非対の文化」は、それぞれ自然環境に由来し老荘思想から生まれている。対の文化は一字から二字の単語“天地、上下”や四字一句“春夏秋冬、东南西北”のリズムを生み、絶句や律詩のリズムができ、単語や連語の意味を分かりやすくしている。対の文化は、一字一概念からなる漢字を対にすることにより、見ても聞いても分かりやすく且つリズムカルにする。対の文化は中国語の連述文や兼語文に影響を与え、重複表現・対比表現・比喩表現にも影響を与える。非対の文化は五七五を基本とし、日本の俳句、短歌、和歌のリズムとなっている。

中国語の連述文・兼語文および重複表現・対比表現・比喩表現は、分かりやすくリズムカルであるが、これらの特徴をそのまま日本語に訳すと冗漫になりやすく、日本の非対の文化にはあまり馴染まない。そのため、これらの表現は、冗漫さを避けるために、可能な限り表現上の工夫がなされ訳されたので、日本語ではいずれも中国語ほど発達しない。以下の文中に現れる名詞の格にも、その傾向がみられる。

(61) 我每天早上七点半骑车去学校。(作例)

A: 私は毎朝7時半に自転車に乗って学校に行く。(筆者訳)

B：私は毎朝7時半に自転車で学校へ行く。(筆者訳)

例(61)の日本語訳Aは、二格の名詞が3回使っている。それでも間違いではないが、一般にはB訳で訳す。B訳は名詞の格(二格)の重複がなくリズムカルだからである。

中国語はSPO文型が基本構造だが、例(61)の連述文や次の2例の連述文などは、対を基本としており、文型が基本構造とはかなり異なる。日本語に翻訳するときは、連述文であれば、以下のような工夫が必要である。

(62) 我坐飞机去中国。(作例)

飛行機で中国へ／に行く。(筆者訳)

(63) 我去中国学汉语。(作例)

中国語の勉強に／で中国へ行く。(筆者訳)

例(62)の連用連語“坐飞机+去中国”と例(63)の連用連語“去中国+学汉语”で作る連述文の構造には「対の文化」が反映されている。それに対し、訳文[飛行機で+中国へ／に+行く][中国語の勉強に／で+中国へ+行く]には「非対の文化」が反映されている。

中国の重複表現・対比表現・比喩表現は対の文化の影響を受け発達する。中国語のリズムは対が基本であるが、これらの表現が発達することにより、連語や兼語および文のリズムも発達する。意味的・構造的な重複・対比・比喩の各表現により、文意が分かりやすく、文がリズムカルになる。これらの表現は今後もますます普及し発達するであろう。日本語のリズムは五七五を代表とする俳句であり、少ない文字でまとまり性のある意味を表すので、語句の重複を嫌う。そのため、日本語にも重複表現・対比表現・比喩表現はあるにはあるが、中国語ほど発達しない。

これらの表現は表意文字の中国語では意味を分かりやすく文をリズムカルにする。表音文字の日本語では単語自体が多音節であるため、これらの表現は意味の重複などにより、文が冗漫になる嫌いがある。それを避けるため減訳などにより文構造を単純化する。そのため、日本語ではこれらの表現が多くないし、中国語ほど発達しない。

言語資料

1. 『人民中国』ショートショート 人民中国雑誌社 1988～1997
2. 『人民中国』楽しく対訳 人民中国雑誌社 2014～2017
3. 『人民中国』ショートショート 人民中国雑誌社 2018～

参考文献

日本語文献

1. 相原茂・石田知子・戸沼市子(1996)『Why?にこたえるはじめての中国語文法書』同学社
2. 興水優・島田亜美『中国語分かる文法』大修館書店
3. 鈴木康之(2000)『日本語学の常識』海山文化研究所

4. ——— (2011)『現代日本語の連語論』日本語文法研究会
5. 朱徳熙著・杉村博文・木村英樹訳 (1995)『文法講義』白帝社
6. 高橋弥守彦 (2006)『実用詳解中国語文法』郁文堂
7. ——— (2017)『中日対照言語学概論—その発想と表現—』日本僑報社
8. ——— (2020)『中日翻译学的基础与构思—从共生到共创』外语教学与研究出版社
9. 松村達夫 (1978)『翻訳の論理 英語から日本語へ』玉川大学出版部
10. 丸尾誠 (2010)『基礎から発展までよくわかる中国語文法』アスク出版
11. 李臨定著／宮田一郎訳 (1993)『中国語文法概論』光生館

中国語文献

1. 丁崇明 (2009)《现代汉语语法教程》北京大学出版社
2. 樊平 刘希明 田善继 编 (1988)《现代汉语进修教程 语法篇》北京语言学院出版社
3. 房玉清 (2008)《实用汉语语法》北京语言大学出版社《实用》
4. 耿二岭 (2010)《汉语语法》北京语言大学出版社
5. 李宝贵 (2005)《语法精讲与自测》北京大学出版社
6. 梁鸿雁 (2004)《HSK 应试语法》北京大学出版社
7. 卢福波 (2011)《对外汉语教学实用语法》北京语言大学出版社
8. 陆庆和 (2006)《实用对外汉语教学语法》北京大学出版社
9. 徐昌火 (2005)《征服 HSK 汉语语法》北京大学出版社
10. 杨德峰 (2004)《汉语的结构和句子研究》教育科学出版社